

# 七重の時

井坂康志

目次

詩人の死

逝く夏

晩秋

蒼き水車

海原

往こう、大きな船で、月と

田舎の人生

愛憐の薔薇

(短歌二つ)

田園に沈思す

錆びた時計台

(きみがわらう)

可憐

あのと看見上げた空を見上げて

銀座の雨

太古の聖堂

フランクフルト夕景

小さな神が暮らす場所

旅人

(無題)

古井戸

天上の序曲——レオノーレ第三番

詩人の死

君よ

朝靄の林に立ち

シラーの嘆きの詩を口ずさむのは  
やめてよ

病める肺とともに

つめたく三日月かかる明け方に

僕は出ていこう

ため息は固く

月はひからびた囁きをする

去りゆく詩人の涙を  
君は知らない

逝く夏

粗いアスファルトの急坂で  
顔は夕日に黒く染まる

やはらかな風の匂い  
遠いクラクション

鐘の音を彼方に聞く

別れはなぜに懐かしく

君の手のひらのようにほのかに白い

晩秋

土曜の朝

からすが鳴いてる

空はつめたくたいらになった

雲はすこしだけ反省してる

もうじき重たい雨になりそうだ

蒼き水車

——朔太郎に

蒼き水車よ

回れかし

凍れる夢の咲く岸の

醒めたる血潮の凜々と

けぶれる地平に広がりて

月は東にかたぶけり

蒼き水車よ

回れかし

さても艶めく死のことく



苦き沈黙の過ぎゆくごとく

わが精神の思惟せんは

今も何をか憂ふらむ

蒼き水車よ

回れかし

回りつつ回れ

回れども

不吉なる黒き淵に

今沈みゆく

海原

少年の日は海に憧れたり

松の林を抜け

砂丘を駆け下りたれば

水平線の果てしなく

遠い潮騒

揺らめく銀の鋼

孤独の憂愁に耐へかねて  
無為の時日を遠く思へば

焼き杭のごときもの

胸の奥処おくがに

いまだくすぶるを知れり

往こう、大きな船で、月と

大きな船で、往こう

波は乱れ高けれども

大きな船で往こう

やがて救われる者たちのために

黙しえぬ者どもよ

時は満ち、かの船は入ってくるだろう

大洋に白き月が立ち昇るだろう

風は屈ぎ、一瞬の息をひそめる  
ときが来るだろう

大きな船よ、満てる月よ

今よりほか

往くべきところはなく

去りゆくべき時はない

田舎の人生

1

側溝の水たまりの油は虹色か  
犬は曇天に何を吠えているか  
小石は銀色にとがっているか  
低く飛行機はうなっているか  
松の葉は茶色く枯れているか  
どこかで煙草の匂いはあるか  
塀にかまきりは揺れているか  
隣家のテレビはついたままか  
郵便受けに鍵は落ちているか  
垣の紫陽花はしおれたままか  
雨樋に虫はひからびているか  
子供の声はくぐもっているか

私鉄の下りホーム

焼き杭と錆びた鉄線に

粗いコンクリートの隙間から

綿毛が下品にはみ出している

幼い日

朝焼けは夕日のよう

波打つ貧しいとたんには

薄く何か透けている

父に連れられた記憶も浮かぶ

あのモスグリーンのレインコートは

今はどこに行っただろう

間もなく列車は鉄路を滑り

一面の田園地帯を駆けていく

粉焼く匂いそして

小学校の校舎はあどけなく

今も田野に建っている

ただ細長い雲ばかり

幾重にも鈍くたなびいて

ポンプ小屋には霜が降り

長靴の農夫がこちらを見てる

3

利根川

一面のすすぎに川瀬の光

朝日かがよう茜の光線は



観音の涙のように

滂沱として降りてくる

手はひからび

まぶたは重く垂れ

心は松葉のように

一握りの賭け金もなくし

過去にも未来にも続いていない

仰ぐべきものも期すべきものも

まして信ずべきものもない

放棄された運河

田舎の人生

愛憐の薔薇

つむりかけたる二重まぶたに

清き雪の降りかかる

薔薇よ

愛憐の薔薇よ

やがて涙は

真紅の頬を濡らす

薔薇よ

愛憐の薔薇よ

つややかなる君の来し方を

風が遠くで歌ってる

薔薇よ

愛憐の薔薇よ

かの情炎のテクスチャー  
木陰が夕日を透している  
薔薇よ  
愛憐の薔薇よ

(短歌二つ)

道往きて

山家やまがに

坐せし

君にしあれば

涙も

みつれ

来し方思へば

根津の瀬に  
百瀬の千早

渡としたれば

まみへし人よ  
君ならなくは

田園に沈思す

窓辺に白む明け方の匂い  
霧につつまれるひなげしの花

ブルーブラックのインク  
書きかけの手紙

黒い水は地下に満ち  
鳥たちは囀りをやめた

つめたく広がる田園は  
原初の海原

納屋では銀の食器の朽ちかけて  
月は今涙の地平に沈む

錆びた時計台

風の死んでる田舎の駅舎に  
黒っぽく錆びた時計台

憂愁の絶えざる時日の  
不吉な地層を透いて  
古いフィルムの映ずる  
暗黒の先史が幾重にも

六代目駅長の就任記念に  
市長から贈られ  
無機質な風と目線に



晒されるだけの

駅舎の錆びた時計台

ひたすら砂埃舞う

鉄路を見つめる

北関東の無明を

来るべき彼岸を恐れるように

野心も意志も探求も洞察も

あらゆる精神的営為をなくし

通過し通過されるだけの

田舎の駅舎の時計台

貧しき人々と

愚かな若者を

時の採石場で

ゆっくりと確実にすりつぶす  
無思想の指令塔

精神の死を

どれだけ見てきたか

乾いたかたつむり

枯れたひまわり

田舎の駅舎の

黒っぽく錆びた時計台

(きみがわらう)

きみがわらう

たのしそうに

うれしそうに

きみがわらう

天国はここにある

死ななくてもいける

天国がここにある

可憐

君よ、憶えている  
はじめて会った日のことを

君よ、リノリウムの鈍い廊下に  
午後の薄日が茜に射し込み

君よ、その手その瞳  
今も古い歌を唄ってる

君よ、いくつかの薫風に  
つばめが時々啼いていた

君よ、あのけさやかな朝  
木陰を薄く透かす光

君よ、だから七重に時がめぐっても  
誰にも言わせはしない

君よ、あのときが

人生でいちばん美しかったなどとは

君よ、魔法を解こう

あの取っ手に手をかけて

名を

君の名を呼ぼう

もう一度出会う、あの場所で

あのと看見上げた空を見上げて

イエーツの詩に目を落としていたら

心がどんどん離れていつて

昔見上げた空を見上げてた

雲の綾なす平野に

青いセロファンみたいに

山がぐらりと揺れていた

戦争帰りの雲の群れは

ひたすら先を急いでる

桃を溶かした容器に

すみれ色のインキは沈殿する

あのと看見上げた空を見上げ  
昔歌った歌を歌ってる

やがて青いカーテンが下りて  
鉄路の軋む声も遠くする

昔見上げた遠い空と  
昔見つめた遠い海

その交わる一点で  
僕はあるかになりたい

胸に広がる海原と  
今吹きわたる夕への風に

銀座の雨

雨降りしきる銀座の街で

昼やはらかな夢を見る

青白き貴婦人のつれだつ姿

右手にしっとり洋燈を掲げ

古い賛美歌を口ずさみ

ストックホルムの白夜の晩に

牧師館に向かう一行の

道は沼気につつまれる

今降りしきる銀座の街で

今日も真白の夢を見る



ヴェール帽子に上衣を羽織り

青い葬送の一行は

遠く森鳴る風を聞く

雨降りしきる銀座の街で

あの葬列にすれ違ふ

太古の聖堂

象徴はステンドグラス

観照は伽藍

言語は列柱

比喻は風

鏡を透かして

丸テーブルに

白い月光は這い

森の奥では

今日も敗れ傷ついた兵士たちが  
いにしへの哀歌を口にする

古井戸の錆びた甲冑

記憶は太古の神殿

ラピスラズリの象嵌の

無限へと続く青銅の隠し扉

地下室にすくがこだまする

フランクフルト夕景

古い家並みを持つ街なら

一つくらいはこんな公園があるものだ

落ちくぼむ木々の蒼々と

憂愁に満ちた年月を思えば

白い刃物のような月が

つるべのように空にかかる

あのけやきの蔭に

龍の鱗に似た雲が

この古い町に地獄のみぞれを降らせる

霞む鉄塔はひたすら

厳冬の到来を嘆く

野菜市場の老婆の声は遠く退いて

カイザー通りのカフェは鉄の鎖を下ろす

掘りかえされた畝を雪が覆い

民家が賤しい軒を田野に晒す

頬と胸ばかり熱にほてり

焼け落ちる夕日

風に冷え肌を切り

夜気が脈を圧して

涙は凍る

小さな神が暮らす場所

もう人生も

秋なんだから

あの場所に行こうか

苔むした庭園や

どんぐりのまばらな公園

古い神の棲まう祠

海の見える丘

時間が流れつつ

止まっている

無音という名の

音楽が流れる

遠い記憶

太鼓の音

この世界のささやかな一隅

この世界から捨てられた

小さな場所

小さな神が

小さなかまどとともに

暮らす場所

旅人

日の出の巨大な太陽が  
大河の果てから  
ぐらぐらと音を立てて  
揺れながら

カイン

生けるものも  
死せるものも  
老いも若きも  
牛も魚も木も草も  
照らす幻影を見た



カイン

君は成就する旅に出た

それは正しいことだった

褐色の肌

絹の光沢

カイン

ゆくりなくもはてしない

世界という大鍋に

君という素材を

煮る旅に出た

カイン

怖がることをならいに

君は旅に出た

ほのかに硫黄の匂いが

漂ってくるようだ

カイン

やがて曼珠沙華の  
いっばいに広がる  
丘に出る

君とそこで

再び出会うのだろう

カイン

(無題)

しあわせだよ

今

おとなになるのが

とてもくるしかったから

こんなふとした風にも

涼を感じる

古井戸

つるべみたい  
に  
冷え固まった自我を  
こんなふう

言葉が古井戸から  
引き上げてくれる

ついさっきまで

地中を流れていた  
清らかな水みたいに

水が生まれてきた霊でなかったら

いったい何なのだろう

言葉が魂をすくいとる柄杓でなかったら

いったい何なのだろう

天上の序曲——レオノーレ第三番

一九八四年二月八日 羽生の産業文化会館にベルリン放送交響楽団が来た日に

指揮者はハインツ・レークナー

知らない名前だけど

ドイツの音楽家に変わりはない

(カラヤンみたいなものだろう)

赤い禁煙の四角い文字が

妙に記憶に残ってる

コントラバスを間近に見れば

まぐるが市場に水揚げされたか

あるいは一酸化炭素中毒で何人も倒れてるみたいだ

ティンパニは二台

冬の朝の陽のように

バレンシア・オレンジ色に光っている

軽いざわめきと開始のブザー

楽団員たちが木の床を軋ませて

舞台上に上り定位置に

たいてい眼鏡をかけていて

いくぶんつかれたタキシード

オーボエ　なんていう

つややかで哀しい音色だろう

黄泉の国で牧人の吹く

誘いの合図みたいだ

やがて楽団を起立させ

拍手の通路に現れたのは

小柄で厚眼鏡のレークナー

眉間に刻まれる皺

親指をあらぬ方向に曲げ

じつにきっぱりと指揮台に立ち

やや前屈みに蝶ネクタイ

おもむろに楽団に向き直る

始まった

始まってしまった

レオノーレ第三番

いきなり全パートが律動し

巨人が重たい扉を開けたみたいに

ゆっくりと



ゆっくりと下がるレガート

フォルテッシモ

そういえば

世界が混沌だった頃

こんな音が鳴っていた

流れ流れてかけりと輝き

金管トリオに導かれ

谷間に吹くのびやかな風

柔らかな草を湿らせて

広い高原をかけめぐる

白や黒の羊たちが

牧草に身を横たえて

地平には楡の木が

何かの象徴みたいに立っている

木陰にいるのはルートヴィヒ

小石をあつめて

破れズボンに手を入れて

不機嫌そうに立っている

(ところでこれは何だろう

母の本棚にあった

一冊の分厚い音楽事典

レオノーレはルートヴィヒが三回書き直して

ようやく完成させた作品で

中間部に豊かなファンファーレがある)

(確かに確かに

これがファンファーレだ

一本のシルバートのトランペット

思ったよりか細くて  
遠い世界から響いてくる  
鋭いけれども柔らかい)

一九世紀はじめのウィーン  
貴婦人たちは馬車に乗り  
喇叭手の音色に耳を澄ませる  
空は鈍色今にもみぞれが  
降り出しそうな  
恐ろしくみだれた低い空

野末に立つのはルートヴィヒ  
ここはハイリゲンシュタット  
街外れのぶどう畑  
小川がしんと足下を濡らしてる

地平にからすが二羽はばたく

さても一陣の風

鈍色の雲

田野を巻き込んで

楡の枯れ葉がちいさく回り

混沌の世界が

一つのまとまりに

編み上げられていく

ヴァイオリン

ピオラ

チェロ

コントラバス

フルート

ピッコロ

(きちんとファゴットもつきあっている)

ぶどう畑が

空に溶け

一つの海になり

海原になり

巨大な凸レンズから

あの光が差ししてくる

フィナーレ

臨終で聞くあの音色

さても金管の大号令

(天国はあなたたちのものだ

なぜなら悩める者は

天国を受け継ぐのだから

主よ、私の魂をお受け下さい

ステファノは叫ぶ)

ティンパニの連打

黒雲は裂けて光の柱は

波を撃ち地をえぐり

ルートヴィヒの魂を

天に迎え入れる

レークナー、万歳

ルートヴィヒ、万歳

死の床で鳴る音楽

魂の応援歌

見よ、すべてはあがなわれた

万軍の主

見よ、私は自由になるだろう

ルートヴィヒの魂とともに

何もいらぬ

名も記憶も墓碑も

ただ私が死んだなら

レオノーレ第三番を三回流してほしい

約束だ

いつかまた会おう

七重の時を越えて

2016年12月14日

七重の時

井坂康志

1972年埼玉県生まれ。詩人。